様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１２２７０

研究課題名（和文）共同体形成に与する身体感覚の研究：ニューカレドニアの舞踊団Wetrの振付を事例に

研究課題名（英文）The Wetr Dance Group in New Caledonia as an Exemplar of Choreography to Build a Sense of Community

研究代表者
富田　大介（Tomita, Daisuke）

追手門学院大学・社会学部・教授

研究者番号：７０６２３８０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ニューカレドニア・リフ島に拠点を置くカナクの舞踊団ウェッチ(Wetr)に関する研究代表者のこれまでの考察をふまえ、その観点を「振付」へと向けて、ウェッチの地域社会で継承される身体感覚の意味を探求するものであった。それは、しかしながら、災禍と疫禍により、現地調査を断念しなければならず(疫禍の回復を見込んで研究期間を一年延長したが、入島禁止は解かれず)、副題への考察を別の機会にすることとし、1.これまでに収集・収録した文献・視聴覚資料の再検討、2.ならびに日本国内の関連実践事例とフランスの現代舞踊美学の考察を中心として、表題中の「共同体形成に与する身体感覚」に関して追究するよう努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1については、聴解において、北プロヴァンスのカナクの舞踊とリフ島ウェッチのそれとを比較している件を認めた（一方に「禁欲的で飾り気がない」、他方に「見栄えのする」という表現が当てられている）。これは、カナクの踊りに「戦」の状況や身振りがあっても、その部族の振付により、同胞ないし他の観衆を鼓舞する度合いが異なることを意味する。
2については、実践考察や論考読解を経て、舞踊の「教える-習う」「見る-見られる」の関係に、身体感覚のシミュレーションを捉えた。これは、ある動きに魅せられる私たちの知覚には、すなわち舞踊を通じた共同体形成の可能性の条件には、身体感覚の潜在的な投射があることを意味する。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the signification of the somesthesis inherited by the Wetr chieftaincy of the Kanak tribe in Lifou island in New Caledonia. The author's previous studies have also focused on the choreography of the Wetr dance group. However, calamities such as the 2018 Osaka earthquake and the COVID-19 pandemic compelled the author to abandon the field investigations in New Caledonia. The study was extended for another year in hopes of the coronavirus disease being controlled. However, no foreigner is yet allowed to enter Lifou island. Therefore, the aspect of the Wetr dance group must be omitted from this study. The author is forced to attempt to extract material on the creation of a sense of community through choreography by reviewing relevant scholarly literature, other documents, and audiovisual materials previously collected or recorded. The revised study will also reconsider relevant cases in Japan and reference articles pertaining to French dance aesthetics.

研究分野：人文学

キーワード：身体感覚のシミュレーション　キアスム　感応／魅惑／ダンス　共同体の意識　舞踊の継承

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

この研究を開始した 2018 年、ニューカレドニアは 20 年前の「ヌメア合意」に基づき、フランスからの独立の可否を問う住民投票を行なった――ニューカレドニアの脱植民地化運動は終わっていない（18 年：投票率 81% 反対約 56%，20 年：投票率 86% 反対約 53%，22 年：議会の要請があれば再び実施）。

ニューカレドニアには、カナク（Kanak）と呼ばれる先住民族メラネシア人がいる。本研究の副題に記した舞踊団ウェッチ（Wetr）は、そのカナクのダンスグループであり、1992 年に、太平洋芸術祭へと参加するため、創設された。「ウェッチ」は、ニューカレドニアの中でもロイヤルティ諸島プロヴァンスに位置するリフ島（Lifou / Drehu）の一地域ならびにそこに住む部族たちの慣習をさす。かつてカナク文化発展庁（ADCK＝Agence de Développement de la Culture Kanak）のリサーチプログラムで 5 年間、ニューカレドニアの歌や踊りを調査・研究した音楽民族学者のレイモン・アマンによれば、「ウェッチの人々が伝統的な踊りを踊ることは、20 世紀初頭には途絶えており、〔中略〕伝統的な振付の礎が残らなかったことから、新たな舞踊が打ち立てられ得た。また新たな振付も創作されねばならなかった」（cf. Raymond Ammann, *Kanak dance and music*, Nouméa : Agence de Développement de la Culture Kanak, 1997, p. 232）。舞踊団ウェッチはその成立からして、新たなものを作る意識を有していたわけである。

とはいえ、その「創作」は、いわゆる「芸術」のためのそれ（l'art pour l'art）とは異なる。ウェッチには、Wetr Kréation という若手主体の創作チームも誕生したが、その新作であっても――その振付をカナクで初めてフランスの舞踊国家資格を得た者が担っても――、いまのところそれは、芸術の発展よりもコミュニティの秩序に与するものと見受けられる。研究代表者は、本研究課題に先立ち、彼らの舞踊表現を考察する中で、その地理や歴史や道徳を反映した作品が、同胞の観客を一体にすることを目の当たりにしてきた（例えば 2016 年にチバウ文化センターで上演された *XÖTR* （= génération）は同胞から熱狂的な支持を得ていた）。

２．研究の目的

本研究課題は、着想時に上記の背景をもち、アマンの仕事を今日の調査によって補う目的をもつ。この課題は、考察の焦点をウェッチの振付に絞るものである――研究代表者は、この焦点化により、舞踊家たちの身体性と観客（同胞）の共同体意識のつながりを知ろうとした。

アマンの言うように、ウェッチの舞踊劇は「演劇的な性格」を有し、その話しや言葉は「道徳的な敬意や責務」を含み、「首長（制）を称える」ものである（cf.*Ibid.*）。それは、先にも記したが、ウェッチにおいては伝統的な舞踊を踊る習慣がもはや継がれておらず、歌や伝説だけが遺されており、「それらの歌や伝説が舞踊の基礎になっていた」からである（cf.*Ibid.*）。舞踊団が創設された 1992 年当時の主要メンバーは、年長者からその歌や伝説を聞き取り、それらの内容をもとに動きを生み出していったのである――それは「創作（創造 création）」であったと元舞踊団の代表は私に語ったことがある。

研究代表者は、以前にチバウ文化センターのメディアーテークで、ウェッチの過去の舞台作品を映像で複数閲覧し、その各作品に劇（印象や思考）の類似性を捉えていた。しかしながら、近年、フランスで数多の芸術経験をふみ、また舞踊の国家資格を得た者がウェッチの代表

を継いだことから、今後もウェッチの舞踊劇に、地域や部族の秩序に与する不変項を読み取ることができるかは、不明である。ウェッチのメンバーは完全に世代を変えており、その創作（芸術）意識も変容する可能性がある。本研究の目的は、現在の、過渡期の創作や教授の場に居合わせ、ウェッチの振付と身体性が共同体意識（の反省・変容）とどう関わるかを調査することである。

３．研究の方法

以上の目的に向けて、本研究は、二年間の研究期間を設定した。研究の要事は、これまでにニューカレドニアで収集・収録してきた文献・視聴覚資料を再検討し、海外現地調査に備えること、そしてその現地調査で、ナタロ（Hnathalo）を中心に部族の生活に加わりながら、歌や踊りの練習（子どものためのアトリエを含む）と創作に居合わせ、振付や身体性の継承ないし改変を捉えることである。

むろん、現地調査では、舞踊団結成当時のメンバーに聞き取り調査を行なう。ウェッチの踊りはどのようにして再生（創作）されたのか。ニューカレドニア・ロイヤルティ諸島の一つ、リフ島には三つの行政・慣習地区――北部のウェッチ、中部のガイチャ、南部のロッシ――があり、それらの間では、かつて争いが絶えなかったそうである。以前に研究代表者が、ウェッチの首長シハゼ家（SHIHAZE）のあるナタロで、舞踊団の元代表ナマノ氏（Umuissi Hnamano）から直接話を聞いたところ、この地は、彼の父親の時代に戦闘を終結させ、代わりに文化事業によって周りと協和していく方針が取られたという。ウェッチの舞踊劇は、そのような争いにまつわることも含意しているであろう歌や伝説を基礎にしている。その舞踊の動きはどのような身体感覚の論理で、また劇の構成はどのような効果を期待されて、編まれたのだろうか。アマンの仕事を手がかりにしながら、それを補完するもの（当事者がその時には語り得なかったことなど）を調査する。

研究の方法はこのように、文献・視聴覚資料の読解と、現地での参与観察ならびに聞き取り調査を主とする。

４．研究成果

本研究は、上述のようにして表題の件を明らかにしてゆくものであったが、開始直後から、予測し得ない自然災害により、その遂行を難しくした。課題実施期間一年目の初夏、研究代表者は、大阪北部地震と西日本豪雨の直接的ないし間接的被害から、またその時に抱えていた仕事の負荷や研究室の復旧等の疲労から、心身に不調をきたし、研究計画で予定していた海外現地調査を実施することができなかった（それに代えて過去の文献・視聴覚資料の再検討は入念になしたが、予定していた現地調査に行けなかったことは悔やまれる）。文献・視聴覚資料の再検討で注力したのが、2015 年をもって終刊となったカナク文化に関する定期刊行雑誌『モァヴェ（MWA VEE）』の再読、ならびに 2016 年にニューカレドニアで関係者へ聞き取りをした際の聴覚資料の再聴である。殊、聴解においては、ADCK の芸術監督ギヨム氏（Guillaume Soulard）への聞き取りに、北プロヴァンスのカナクの舞踊とリフ島ウェッチのそれとを比較している件（一方に「禁欲的で飾り気がない(austère)」、他方に「見栄えのする(spectaculaire)」という表現が当てられていること）を認めた――これは、テーマないし発端として、カナクの多くの踊りに「戦(guerre)」の状況や身振りがあったとしても、振付の違い

すなわち慣習を共にする共同体の身体感覚や心情によって、同胞ないし他の観衆へのインパクトや鼓舞する度合いが異なるということである。

二年目、研究代表者は、心身を回復させ、後半に長期の現地調査を行なうつもりであったが、疫禍の影響により渡航ができず（そのため研究期間を一年延長したが、ニューカレドニア・リフ島への入島禁止は解かれず)、研究の焦点を変えざるを得なかった。そこで私は、副題の考察を別の機会にすることとし、日本国内の関連実践事例とフランスの現代舞踊美学の考察を中心に、表題中の「共同体形成に与する身体感覚」について、原理的な研究をなすよう努めた。具体的には、伝統芸能と現代舞踊の文脈を往来する日本人舞踊家佐久間新の実践考察、またパリ第八大学に舞踊学科を創設したミシェル・ベルナールの論考読解を経て、舞踊の「教える-習う」あるいは「見る-見られる」の関係に、身体感覚(自己受容感覚)のダイナミックなシミュレーションや、対称性から非対称性への移行があることを突き止めた。これは、ある動きに魅せられる私たちの知覚には、すなわち舞踊を通じた共同体形成の可能性の条件には、身体感覚の潜在的な投射があることを意味する――この見地は本研究課題を部分的に解明する（この研究成果は「踊り／関わり 佐久間新の鏡」として『舞踊學』43号,2020年12月,102-119頁に掲載）。

また、疫禍により、パフォーミングアーツに関しても、映像で表現することや鑑賞することが増えた。研究代表者はそこで、パフォーマンス・アーティストによる長編映画の評論を執筆した（「contact Gonzo『MINIMA MORALIA』：断片の接触」,美術手帖 web 版,2020 年 7 月, https://bijutsutecho.com/magazine/insight/22396 ）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 富田大介	４．巻 -
２．論文標題 「表現コミュニケーション」コースの教育	５．発行年 2020年
３．雑誌名 OTEMON HYOCOMI（追手門学院高等学校 表現コミュニケーション コース）ブックレット	６．最初と最後の頁 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 富田大介	４．巻 -
２．論文標題 contact Gonzo『MINIMA MORALIA』評論：断片の接触	５．発行年 2020年
３．雑誌名 WEB版 美術手帖（https://bijutsutecho.com/magazine/insight/22396）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 富田大介	４．巻 43
２．論文標題 「踊り／関わり 佐久間新の鏡」（舞踊学会大会シンポジウム「舞踊学の現在と可能性」発表原稿）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 舞踊學	６．最初と最後の頁 102-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 富田大介	４．巻 42
２．論文標題 The Routledge Companion to Butoh Performance 書評	５．発行年 2019年
３．雑誌名 舞踊學	６．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田大介	4．巻 No.34
2．論文標題 image/声風：『RADIO AM神戸69時間震災報道の記録』リーディング上演を終えて（表象文化論学会第13回大会報告）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Newsletter「REPRE」- 表象文化論学会ウェブサイト	6．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 富田大介	4．巻 第4298号
2．論文標題 震災報道の記録劇	5．発行年 2018年
3．雑誌名 新聞協會報（日本新聞協会発行 2018年7月17日）	6．最初と最後の頁 1（「磁気テープ」欄）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 富田大介	4．巻 —
2．論文標題 共創の舞踊劇『だんだんたんぽに夜明かしカエル』（兵庫公演）について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 共創の舞踊劇『だんだんたんぽに夜明かしカエル』報告書	6．最初と最後の頁 27頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　5件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 富田大介
2．発表標題 踊り／関わり 佐久間新の鏡 Chiasme - short essay on Sakuma's dance -
3．学会等名 舞踊学会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 富田大介
２．発表標題 「Radio AM神戸69時間震災報道の記録リーディング上演」考察
３．学会等名 日本災害復興学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 企画・構成：富田大介、演出：伊藤拓、音響：佐藤武紀、出演：稲津秀樹、岡野瑞樹、岡元ひかる、金子リチャード、富田大介、秦詩子、古川友紀、本多弘典、山崎義史、吉水佑奈
２．発表標題 パフォーマンス『Radio AM神戸 69時間震災報道の記録』リーディング上演
３．学会等名 表象文化論学会（第13回大会 2018年7月7日 神戸大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 発表：石田圭子、稲津秀樹、江口正登、富田大介、伊藤拓、司会：門林岳史
２．発表標題 企画パネル『Radio AM神戸 69時間震災報道の記録』リーディング上演をめぐって
３．学会等名 表象文化論学会（第13回大会 2018年7月8日 神戸大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 富田大介
２．発表標題 舞踏譜と語り
３．学会等名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科「学術Weeks2018：土方巽の舞踏譜」（2018年12月2日 神戸大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

（１）image/声風：『RADIO AM神戸69時間震災報道の記録』リーディング上演を終えて https://www.repre.org/repre/vol34/conference13/performance/ （２）『RADIO AM神戸69時間震災報道の記録』リーディング上演をめぐって https://www.repre.org/repre/vol34/conference13/kikaku/ （３）舞踏譜と語り http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5409 （４）The Routledge Companion to Butoh Performance 書評http://www.danceresearch.ac/buyougaku/2019/2019_42_66_67.pdf （５）contact Gonzo『MINIMA MORALIA』評論：断片の接触 https://bijutsutecho.com/magazine/insight/22396

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関